

企画提案者名：岐阜女子大学

**採択条件への対応**

- ・ 先進的な記述内容が分かりにくいので、具体的に記載すること。

(回答)

- ハイブリット型授業のデザインは、対面と e-Learning を組み合わせた授業のことで、教師の主体的で対話的な深い学びを実現するように受講者の「研修観」を転換する授業をデザインする。

⇒本指摘については、実施計画書 P3 に、以下内容を追記します。

ハイブリット型授業のデザインは、対面と e-Learning を組み合わせた授業のことで、教師の主体的で対話的な深い学びを実現するように受講者の「研修観」を転換する授業をデザインする。

- ・ 定員充足率が低迷しているが、対策を検討すること。また、上進実績に基づいた見通しを計画書に明記すること。

(回答)

- 昨年度については、需要調査のために全国を対象に広報し、受講者を集めたために、全国からの受講者は集まったが、広報が充分でなかった反省点がある。今年度は、本年度の需要調査の結果、沖縄県と岐阜県が多かったことから、地域を絞って広報し、定員充足率を 70%以上上げる。
- 令和 4 年度上進の実勢には、31 名受講終了中の 18 名となっている（3 月 19 日時点）。受講終了生の半数が上進をしていることとなる。この実績より、令和 5 年度においては、180 名の定員について 70%以上の定員充足とし、126 名は最低でも受講生を確保していく。その中の 50%の上進と考え、63 名の上進者を目指すものとする。ただし、上進者の向上も図るために、受講後の案内を強化し、上進できる条件の受講生には上進をすることをさらに呼びかけていく。

⇒本指摘については、実施計画書 P5 に、以下内容を追記します。

- 昨年度については、需要調査のために全国を対象に広報し、受講者を集めたために、全国からの受講者は集まったが、広報が充分でなかった反省点がある。今年度は、本年度の需要調査の結果、沖縄県と岐阜県が多かったことから、地域を絞って広報し、定員充足率を 70%以上上げる。
- 令和 4 年度上進の実勢には、31 名受講終了中の 18 名となっている（3 月 19 日時点）。受講終了生の半数が上進をしていることとなる。この実績より、令和 5 年度にお

いては、180名の定員について70%以上の定員充足とし、126名は最低でも受講生を確保していく。その中の50%の上進と考え、63名の上進者を目指すものとする。ただし、上進者の向上も図るために、受講後の案内を強化し、上進できる条件の受講生には上進をすることをさらに呼びかけていく。

・「教えないで学べる」や「タキソノミーテーブル」等、分かりにくい言葉が多く使われており、どのようなシステムなのか分かりにくい。教えないで学べる学修環境の整備とは、ただ e-Learning の教材を渡すことだけなのか。具体的にどのようなことが、教えないで学べる学修環境になるのか、分かりやすい言葉で示すこと。

(回答)

○システムについては、対面 (Zoom) と e-Learning を組み合わせたハイブリッド型の講座となり、いつでもどこからでも学ぶことができるシステムとなる。

○また、教えないで学ぶとは、子どもたちの学び(授業観・学習観)とともに教師自身の学び(研修観)を転換し、「新たな教師の学びの姿」(個別最適な学び・協働的な学びの充実を通じた、「主体的・対話的で深い学び」)を実現することである。

そのためにキャリアステージに対応した幼稚園教諭に求められる資質能力や内容や目標を構造化し、タキソノミーテーブルとし見える化を図ると共に、テキストや動画についても工夫をする。

○教えないで学べる学修環境の整備は、e-Learning において、従来のテキスト並びに動画資料だけではなく、本学の持っている教育用コンテンツを整備し、QR コードでリンクをし、補充並びに発展的な学修ができる学修環境の整備をする。

⇒本指摘については、実施計画書 P3 に、以下内容を追記します。

システムについては、対面 (Zoom) と e-Learning を組み合わせたハイブリッド型の講座となり、いつでもどこからでも学ぶことができるシステムとなる。

また、教えないで学ぶとは、子どもたちの学び(授業観・学習観)とともに教師自身の学び(研修観)を転換し、「新たな教師の学びの姿」(個別最適な学び・協働的な学びの充実を通じた、「主体的・対話的で深い学び」)を実現することである。

そのためにキャリアステージに対応した幼稚園教諭に求められる資質能力や内容や目標を構造化し、タキソノミーテーブルとし見える化を図ると共に、テキストや動画についても工夫をする。

教えないで学べる学修環境の整備は、e-Learning において、従来のテキスト並びに動画資料だけではなく、本学の持っている教育用コンテンツを整備し、QR コードでリンクをし、補充並びに発展的な学修ができる学修環境の整備をする。

・現職教員の研修なので、学習者同士のコミュニケーションを促すことは重要である。そのコミュニケーションの在り方を研究し、開発するということが記されているが、具体的にどのような研究を進めていくのかが不明であるため、明記すること。

(回答)

○受講者の受講後のアンケートから、対面と比べて e-Learning が中心だと受講者間のコミュニケーションが取れないため、内容や課題について誰とも相談できないとの指摘があった。そこで、本年度は、受講期間中 1~2 回程度、講師と受講者並びに受講者間でコミュニケーションの時間を新たに設定し、どのような内容の話題で話をしているかを調査し、コミュニケーションの方法を研究する。

⇒本指摘については、実施計画書 P3 に、以下内容を追記します。

受講者の受講後のアンケートから、対面と比べて e-Learning が中心だと受講者間のコミュニケーションが取れないため、内容や課題について誰とも相談できないとの指摘があった。そこで、本年度は、受講期間中 1~2 回程度、講師と受講者並びに受講者間でコミュニケーションの時間を新たに設定し、どのような内容の話題で話をしているかを調査し、コミュニケーションの方法を研究する。

#### 評価コメントへの対応（事業計画書の修正がある場合）

・キャリア、ミドルの育成を意識し、幼児教育コーディネーターにつなげようとしている点を評価する。

・講習科目「遊びと文化Ⅰ」「保育内容(表現)」が、実技修にならないよう気を付けていただきたい。

(回答)

○ 十分気を付けて実施する。

・「遊びと文化Ⅱ」の概要を読むと、幼児の作品の評価方法を学ぶようにとれてしまうが、評価をどのように捉えているのか、ご説明いただきたい。

(回答)

○授業概要を授業の内容が正しく伝わるように以下のように修正いたします。

○フレーベルの恩物について知識を深め、ちぎる・切る・折るといった造形活動についてあらためて考えるとともに、フランダースや OSIA が開発した行動カテゴリーについて理解し、幼児の学びのプロセスを捉え、改善・指導できる力の深化を図る。

○本授業では、幼児が造形活動を行っていく過程、つまりは、幼児の学びのプロセスを捉

える方法を学ぶこととしている。その学びのプロセスを捉える方法を評価の一つと捉えている。この学びのプロセスを捉える方法を学ぶことで、受講生が自身の指導方法を振り返ることができ、その改善に努めることができるようにすることを目標としたい。

↑久世先生案を上記に置き換える

久世先生案

○幼児期に遊ぶ「折り紙」や身近にある「紙コップ」や「紙皿」などを使い、動くおもちゃを作る。その過程を通して、幼児に身に付けさせる力を考え、それを指導するための方法を創造し、考案する。

○幼児が安定した確かな作品ができるか等の視点を定め、幼児の学びのプロセスの評価方法を考える。

- ・ 成果目標の指標が明示されており、自己評価と外部評価による評価システムはモデルとなると感じた。
- ・ 幼稚園関係団体との連携・協力を得て、より広く教員の実態・ニーズの把握が進むことを期待する。
- ・ ミドルリーダーや幼児教育コーディネーター育成の目標に向けた講習内容としては、園運営のための組織づくりやカリキュラムマネジメントなどの講習内容や手法が必要ではないか。

(回答)

○ 園運営のための組織づくりやカリキュラムマネジメントなどの講習内容や手法は必要である。しかしながら、本講座を受講する対象は、実務経験 12 年以上の幼児教育の現場で中心的な役割を担う中堅層（ミドルリーダー）であることから、これらの内容については実務的に経験値があるものと想定して講座を設計している。

- ・ 沖縄県との連携で、沖縄の教員が受講できるシステムとなっている点は評価できる。
- ・ 幼児教育コーディネーターの養成カリキュラムとして位置付け、専門性の向上を図ろうとしている点も評価できる。
- ・ 講習の「遊びと文化Ⅰ・Ⅱ」は、科目概要に、折り紙や動くおもちゃ、確かな作品ができるか等の具体的な記述があり、「領域の表現」に重きが置かれているように感じるが、その場合「領域表現」や「保育内容（表現）」という科目になるのではないか。遊びも文化もとても幅広いものであるので、科目の概要にも誤解が生じないよう整合性

を図っていただきたい。

(回答)

- 遊びと文化は、幼児期に遊ぶ「折り紙」や身近にある「紙コップ」や「紙皿」などを使い、動くおもちゃを作る。その過程を通して、幼児に身に付けさせる力を考え、それを指導するための方法を創造し、考案することを目的としている。
- 従って、折り紙や動くおもちゃなどを通じて、幼児が安定した確かな作品ができるか等の視点を定め、幼児の学びのプロセスを捉える方法を考える科目である。
- 今後、「保育内容（表現）」などとも整合性を図って指導する。

・開設する認定講習のうち、「幼児理解」「教育相談」は「講義」となっているが、現場の実践の中で、たくさんの事例をもっている現職教員なので、そうした実践と理論の往還が図れるよう、グループワークやディスカッション等を組み込んだ「講義・演習」型となるような工夫を検討いただきたい。

(回答)

- 受講者の受講後のアンケートから、対面と比べて e-Learning が中心だと受講者間のコミュニケーションが取れないため、内容や課題について誰とも相談できないとの指摘があった。そこで、本年度は、受講期間中 1~2 回程度、講師と受講者並びに受講者間でコミュニケーションの時間を新たに設定する。この中で、グループワークやディスカッション等を組み込んだ「講義・演習」型となるような工夫を検討する。

・経費のなかに、開設する講習担当者の謝金がないようだが、計上しなくても良いのか確認いただきたい。

(回答)

- 講座担当者は本学の教員であることから業務として位置付けている。従って、謝金は設定しない

#### **事務局コメントへの対応**

・誓約書について、生年月日が明らかとなる資料も添付すること。

⇒生年月日が明らかとなる資料を添付します。

- ・「9. 経費項目の積算」について、過去のものを使用していると思われるので、今年度の様式で再提出すること。

⇒今年度の様式で提出いたします。

- ・本事業については、講習実施大学と自治体や国公私の幼児教育関係団体との十分な連携の上での事業実施に効果が認められるとともに、各地域・団体等とのニーズに合った講習内容・手法の工夫が期待される。特に、講習実施大学が受託している場合には、自治体の幼児教育担当部局との一層の連携の充実を図ることが重要であることから、令和5年度事業終了後も見据え、自治体をはじめとする関係者との一層の連携に取り組むこと。

⇒継続して連携強化に努めます。

- ・事業終了後に、受講者にアンケート調査を行い、事業成果の把握に努めること。

⇒アンケートを実施するとともに、受講者とのディスカッションをとおして、成果の把握に努めます。

- ・テーマ1の「オンライン・オンデマンド型を活用した効果的な講習等の開発・実施」を選択する場合には、その講習の内容については、受講者が受け身の姿勢で学ぶのではなく、双方向型・対話的な指導方法となるよう検討・工夫し、調査研究としての成果の蓄積に努めること。

⇒コミュニケーションの在り方の重要性に鑑み、研究し講習方法の開発に努めます。